

皆さんは、そして皆さんが生活している社会は、さらに世界は、御承知のように新型コロナウイルスという脅威に直面しています。長期的にみれば、今後も私たちは未知のウイルスによる感染症、地球温暖化が要因とされる大規模気候変動、激甚な自然災害、大地震とそれが誘発する人災などと向きあいながら生きていかなければならない可能性が高まってきているように思われます。ただいまは、御入学おめでとうという言葉をご贈ります。

大地震とそれともなう人災、疫病の流行にさいしては、それまで行われてきた政治や行政のありかた、そして、そうした事態への政治・行政の対応ぶりが問われることとなります。2011年3月に東北地方を中心とする東日本を襲った大地震・津波と東京電力福島第一原子力発電所事故に関しては、地震が頻発する列島国家において防災・減災のための政策が十分に講じられてきたか、津波対策とは防波堤づくりとその高さの問題にとどまっていなかったか、1950年代からの日本の原子力政策は安全神話のうえに胡坐をかいてきたのではなかったか、等々の問題が惹起されました。いまは、ウイルス感染検査体制や医療体制のありかた、外出「自粛」要請という政治手法と政治責任、休業ともなう経済的補償、緊急事態宣言における放送局など「指定公共機関」への国家権力の介入と「言論・報道の自由」「知る権利」との緊張関係といったことが問題として指摘されています。こうして社会は危機に直面したとき、その政治や行政の「底力」を問われるものですが、問われるのはそれだけではありません。政治・行政を考察や批判の対象とし、ときに研究成果が実際の政治・行政にフィードバックされる学問である政治学も実力を問われるのです。「政治学は役にたつのか？」と。

日本の政治・行政を評価したり、「政治学は役にたつのか？」という問いの答えを見つけだすことは容易くありません。ただし、政治学科では、その糸口を提供できる授業をたくさん揃えています。そして、その特徴はとても自由なことです。まず、必修科目は「政治学の基礎概念Ⅰ／Ⅱ」しかありません。これは理論・思想・歴史・政策・都市・行政という各分野の教員がリレー形式でおこなう講義です。政治学という学問の概要を頭にいれ、自分の興味関心の所在を確かめるとよいでしょう。大学での学びの基礎を築きたいと思う人には、「政治学入門演習」をおすすめします。十数人のクラスで基本文献や資料の精確な読み方、レジュメの作成方法、プレゼンテーションの技能などが学べます。そのうえで、原則として2～4年生で履修する「演習」と「外国書講読」をのぞけば、ほとんどの科目が1年生にも開かれているのです。さらに、教室で教員の話の聞いたり、文献を読んで報告するかたちの授業——こういう授業を座学と言います——だけでなく、教室から地域社会へ飛びだし、その地がかかえる政策課題をフィールドワーク（現地調査）を通して発見し、考える授業（「公共政策フィールドワーク」〔2020年度は不開講〕および「現代政策学特講Ⅰ／Ⅱ」）も用意されています。

このように、学びの場はいくらでも開かれています。あとは皆さんの学びたいという意志だけです。授業は皆さんと教員とのあいだの相互共同作業として成り立ちます。意志ある学生はどの教員も歓迎し、真摯に向き合うはずですが、新型コロナウイルス禍で皆さんと直接お会いして授業をおこなうのは暫く先になります。その日まで御自身と周りの方々の健康に留意してください。以上をもちまして、私の挨拶とします。

2020年4月7日

政治学科主任 明田川 融